

## Story of 13 years ago



1996年3月号掲載 米須邸の13年後  
**樹齢80年の金山杉を  
 組み上げた  
 力強く美しい家**

設計：山中文彦 東京／米須邸

敷地はJRの駅まで徒歩15分弱。隣地は「以前はクリ林だった」ということから分かるように、古くから土地に根付いてきた人たちが暮らす地域だ。計画的に住宅地として区割りされたというより、地主さんたちの土地に、少しずつ家が建つていった様子がかがえる。米須夫妻も、妻がこの土地で生まれ育ったのだという。

米須さんが家の勉強を始めたのは、家を建てる3年も4年も前のこと。「建てる時期ははっきりとはきめていなかった」そうだが、山中さんの主宰する「家づくりフォーラム」(現・木の家の体的な日程は考えていなくても、土地のあてがあるだけに、その姿勢はかなり真剣で、凝り性の性格も手伝って、次第に山

中さんの家づくりのスタイルにはまってい。

今も続く山中さんの設計スタイルは、秋田杉と並び称される良材の金山杉と深く結びついたもの。金山町の森林所有者の共同組織である金山町森林組合や地元の大工たちとネットワークを組み、良材と確かな技術で家を建てる。米須さんが参加した家づくりフォーラムは、そんなネットワークの流れから家づくり全体まで、幅広くレクチャーを受ける勉強会だった。

「設計をお願いしてからは、本当に何も衝突するようなことはなくて、プランもすんなり決まったと思います」と米須さんが語るのには、勉強会の中で、山中さんの考える家づくりのあり方が米須さんに浸透していたということがかもしれない。



山中文彦 (やまなか・ふみひこ)  
 1955年長野県生まれ。明治大学工学部建築学科卒業。大野建築アトリエを経て、1991年フィールドネット一級建築士事務所開設。翌年、木の家づくりネットワークを設立し、建築家・設計事務所を中心とした木材産地、職人のネットワークづくりに従事。産地の良材と地元の職人たちの技を取り込んだ家づくりを手掛けている



(上)開放的な2階リビングダイニング。棟の位置は、ちょうどペンダントが下がる場所になるが、広さを確保するためにあえてキッチン側に柱をすらすらしている。上部吹き抜けに架かるダイナミックな梁の構成は、この柱のすれを補う意味もあった。写真の手前に見えるタタミが、2階の一角に置かれた居心地のよい和室 (下右)1階子供室への扉。「予定どおり」個室2つに分割されている (下左)奥から玄関方向を見たところ。1間幅の広さは、廊下というよりひとつの「部屋」と呼んでもよさそうな余裕がある。左に見えるのが子供室への扉



米須邸外観。右に見えるのが、同じ金山杉でつくられた立派な車庫で、外部収納や自転車置き場も兼ねる。路地の一番奥にある米須邸では、隣戸との間にこの車庫を設けることで隙間をつくり、南からの日差しをたっぷりと受けることができる



竣工後13年目を迎えようとする米須邸は、立派な車庫もそのままに、ほぼ変わることなく我々を迎えてくれた。  
「それほど傷んでいるところもなかったんですが、2、3年前、10年の節目ということで外装は塗り直してもらいました」というしつかりしたメンテナンスも、家をいっそう変わらない姿にしているのだろう。内部もほとんど変わったところはなく、唯一、12畳分あった大きな子供部屋が中央で仕切られ、予定どおり2人の娘のための個室になった。だがここも、「子供たちは、しつかり間仕切りしたい、と言っ

## 良材の架構が つくりだす空間は 若々しいエネルギーも 与えてくれる

たんですが、「どうせいなくなったら、また広くして使うんだから」というのが親の意見で、「妥協の産物として」アコーディオンカーテンで緩く仕切られているに過ぎない。  
階段を上がると、「個室は基本的に寝るだけだから、日中、長い時間を過ごす場所を、明るくて環境のいい2階に持つてきたかった」という米須さんの希望どおり、居心地のよいリビングダイニングが広がる。2階にメイン空間を持つてくるのは、樹齢80年という金山杉の構造がつくりだす吹き抜けにも有効で、高い吹き抜けと4方向の窓

から入る日差しが、2階全体を大らかに包む。さらにリビングの一角にしつらえた四畳半の和室も家族のお気に入り入りで、「遊びに来た子供の友達が、「ここ、気持ちいい」ってゴロゴロしている」こともあるそうだ。  
「米須さんは変わりませぬね」久しぶりに会ったという山中さんがつぶやく。確かに50歳近いとは思えない夫と、娘たちと友達のようにやりとりする明るい妻の若々しさは印象的だ。山中さんがこだわる金山の良材は、気持ちのよい生活空間とともに、家族の元氣まで与えてくれるのかもしれない。